

# 学 会 報 告

## 日本国際地域開発学会 2006 年度春季大会

小泉 達治

日本国際地域開発学会 2006 年度春期大会が平成 18 年 4 月 22 日に日本大学生物資源科学部（神奈川県藤沢市）において開催された。

今回は学会創立 40 周年を記念して、開催された。今回のシンポジウムでは、まず、紙谷貢氏（元東京農業大学教授）による「社会経済開発の今日的課題」についての記念講演が行われた。この講演では、援助の実績は約束と実行額のズレ、厳しいコンデショナリティ等の問題を抱えており、今後は援助の質の改善や人間開発の重点移行等をより重視すべき点が論じられた。

また、この後に、「国際協力の新潮流」をテーマとした竹谷裕之氏（名古屋大学）による「開発途上国の農業分野における国際協力の課題」が講演され、新しい国際協力に適確に対応した開発学会の在り方について報告が行われた。特に、農学系大学の国際教育協力の連携強化、農学国際教育協力に期待される点についての報告は、大変興味深いものであった。この他にも高根和正氏（外務省経済協力局）から「我が国の ODA の取組みと NGO 支援」、荒木美奈子氏（お茶の水女子大学）による「タンザニア南西部マデンコ高地における『地域開発』——プロジェクトと住民のインターアクションに注目して——」についての基調報告が行われた。

個別報告では、20 名の研究者から、東アジアのコメ増産の要因分析、ベトナムを事例とした途上国の家畜疫病と農村の貧困、インドネシアを対象とした農業・農村開発プロジェクト持続性に関する研究、サヘル地域を対象に牧畜民フルベの生業活動と農耕民のかかわり等、東南アジア、西アフリカ、東アジア、南米国、南アジアと広範な地域を対象とした研究報告が行われた。

当研究所からは小生が「ブラジルのエタノール政策の動向と課題について」の報告を行った。報告ではまず、ブラジルのさとうきびを原料とするエタノールについては政府の輸出拡大政策により、輸出量の拡大が見込まれるほか、国内需要量の拡大や砂糖の輸出量の増加も見込まれている点を指摘した。そして、今後、ブラジルが、エタノール・砂糖への配分を変更せずにエタノール・砂糖を増産するためにはさとうきび増産を行うことが必要であり、さとうきび増産は、エネルギーと食料との競合関係を緊迫化させ、競合農畜産物の国内需給のみならず国際需給にも影響を与えると同時に、土壌浸食、大気汚染、森林火災、土壌塩類集積、水質汚染、生態系の影響等の環境へ更なる悪影響を与えることが懸念される点を結論とした。

本学会は、農業を中心とする開発と環境保全をテーマとしており、学会員の各有識者からブラジルにおけるさとうきび増産に伴う競合農畜産物需給への影響、環境への影響についての御意見を伺って、小生の今後の関連研究を深めていく上でも大変貴重な知見を得ることが出来た。